

グレン・ドーマン将士は、幼児教育について、30年余の経験と実績を持った方です。そのドーマン博士をここにお招きし、いろいろとお話をうかがう機会に恵まれたことは、感謝に耐えません。先生は、これまで脳障害児の治療に当たり従来不可能と考えられていた脳障害児の回復に貴重な実績をあげておられます。

1909年、米国ペンシルバニア州に生まれる。1940年、ペンシルバニア大学物理療法科を卒業。その後、テンブル大学病院、ペンシルバニア病院に勤務し、1945年には、ノーヒット・リハビリテーション・センターの理事。1965年フィラデルフィア人間能力開発研究所を創設し会長に就任。プレイトン大学から名誉博士号を受け、現在、人間能力開発研究所の所長として、世界各国で脳障害児の治療に当たり、優れた成果をおさめている。

現在の仕事

柳平：まず最初に、フィラデルフィア人間能力開発協会は、現在、どのような仕事をしていらっしゃるのか、お聞きしたいと思います。

ドーマン：この協会は、20年前に、非常に重い脳障害の子供たちに治療を加えるためにつくられました。目も見えない耳も聞こえな

いというような子供たちのためです。私が、この事業を始めました時は、脳障害児の治療が目的でした。幼児の才能をどう伸ばすかということについて、日本で、お話することなどは、少しも考えていませんでした。

しかし、何事についても、真の研究者、良心のある研究者というのは、その研究がもたらす全ての道へと踏み分けていかなければなりません。たとえ、それが、最初の目的からズレたものであっても……。

脳障害児を治療しているうちに、私は、何人かの障害児は、普通の子供と同じように行動することに気づきました。ある部門では、普通の子供より優れた能力を発揮することを発見しました。ある脳障害児たちは、普通の子供達より早い時期に読めるようになるのです。これは、いったい、どういうことだろうと考えました。これには、二つの答があったかと思います。一つは、脳障害があるということは、良いことではない、マイナスである。従って、当然、そんなハズはない。二つは、普通の子供たちの方に、何か足りないところがあるのではないか、という疑問です。この事実から、私は、単に脳障害児の治療だけではなく、全人類の知能の向上に貢献しようと思い始めたのです。